

子どもから学ぶ専門性 ——全早研が岐阜で研究大会

1月25、26日、全国視覚障害早期教育研究会（全早研、猪平眞理会長＝宮城教育大学名誉教授）は、第21回全国視覚障害早期教育研究大会を、岐阜市の岐阜県立岐阜盲学校（林亨校長）で開催、約80人が参加した。

開会の挨拶で猪平会長は、「視覚障害児の早期教育の充実に向けて、温かい気持ちで集まってくださった方に感謝」するとした上で、平成19（2007）年の第8回大会の会場も岐阜盲学校であり、岐阜市は全早研の発足とも深い関わりがあると紹介。以前、同市で開催されたある説明会で、「乳幼児の教育指導に関する全国的な研修と情報交換の場」の必要性を共有したメンバーが、平成9年に勉強会を開始、平成12年に全早研として第1回山形大会を開催し、昨年の松本大会で20回の節目を迎えた。

25日の総会では、令和2年度より、発足以来会長を務めている猪平さんが新設された名誉会長に、今研究大会で講演を行なった荒木良子さんが会長に就任することを決定。研究会の一層の充実に向けて新しい歩みを踏み出した。（本誌）

盲学校で育てられた「あしば」

福井大学教職大学院 准教授の荒木良子さんによる講演は「自分の『あしば』を創り、^{あらた}革め続ける——インクルーシブ教育の実践から」というもの。大学の文学部を卒業後、福井県の教員として採用された荒木さんは、盲学校に27年間、その後、特別支援学校にも勤務し、幅広い年齢や障害のある人を支援する中

で専門性を模索した。荒木さんは、①重複障害教育に注力、②乳幼児から高校生までを担当、③地域で育つ視覚障害幼児児童の教育相談活動——に整理される中心的な実践の中で「視覚障害教育に関わる自分なりの考え方」を身につけたという。

演題にある「あしば」とは、心理学者・梅津八三の示したもので、「現場情勢」（なりゆき）、「作業仮説」（だんどり）、「仮定系」（あしば）の3つが双方向に関わる、教育的対処の循環の構図の一部。荒木さんは、「あしば」は理論的な背景や信念などを指すものであり、今回の講演は「インクルーシブ教育（考え方）についてのわたしの『あしば』が構築され、問い直されてきた過程」という。その上で、「地域での育ちを教えてくれた保育園とイッセイクン」と「教育相談の仕事について問い直しが続いたMさん」の2つの事例をふり返った。

全盲男児のイッセイクンは、地域の保育園、小学校、中学校に通い、中学3年で盲学校に転校。その間、荒木さんは巡回相談や来校相談などに継続的に取り組んだ。

視覚障害児の受け入れに不安を抱えていた保育園との協働や、福井県で初の全盲児のインクルーシブ保育は、荒木さんにとって「教育相談に関わる基本的な考え方を確立していく過程」だったという。その考え方とは、インクルーシブな教育を目指す中での「視覚障害教育の専門性」の大切さ、「視覚障害コミュニティ」としての盲学校の存在意義、他校種との協働の必要性だという。

もう一つは強度弱視の女児Mさんの事例。Mさんが地域の保育園に通い出して以来、やはり、盲学校の教育相談担当や特別支援学校訪問部（中学部）担任として長く関わった。